

広報そえだ 町長室

私は8月21日をもって、4期16年務めさせていただいた町長を退任しました。16年間、毎月私の想いや考えをお伝えしてきました「広報そえだ町長室」も本稿で終了となります。最後にこれまでの町政を振り返りながら、添田町のこれからについて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

未来へつなげるまちづくり

私が町長に就任した頃から、添田町を取り巻く環境は大変厳しいものでした。人口減少、高齢化、財政問題、地域交通、医療、福祉、教育、そして災害。次々に課題が押し寄せる中で、常に考えて来たのは、「今だけではなく、10年後、20年後の添田町をどう残すか」ということでした。

最も大きな課題の一つが人口減少でした。そこで私は、若い世代に添田町へ住んでいただきたいという想いから、若者定住住宅の整備を進めました。

また、老朽化が進んでいた町営住宅も計画的な建て替えを行い、安全で快適な環境づくりに取り組みました。住宅は単なる建物ではありません。そこに若い夫婦が住み、子どもが生まれ、地域に新しい活力が生まれます。人口減少が進む中だからこそ、私は「若い世代への投資こそ未来への投資」と考えて来ました。残念ながら人口減少そのものを止めることはできませんでしたが、だからといって何もしないのではなく、添田町で暮らしたいと思っただけでいい環境づくりを進めてきたつもりです。若者定住住宅の整備から始まり、学校づくり、子育て支援、地域交通

私は人口減少そのものよりも、人口構成に危機感を持っています。特に20代から50代のみなさんです。働き、家庭を築き、地域を支える世代が減ることが最も大きな問題です。高齢者が安心して暮らせる町はもちろん大切です。しかし、それだけでは町は維持できません。若い世代が添田町に住みたい、帰ってきたい、子育てしたいと思える町にしなければなりません。

私は今後の目標として、添田町の人口を8千人程度で維持することを目指して欲しいと思っています。簡単なことではありません。しかし、不可能でもありません。

添田町には自然があります。歴史があります。人の温かさがあります。都市部にはない魅力があります。その魅力を活かしながら、移住定住を進めて行く必要があります。私はこれからのまちづくりは女性の視点がますます重要になると思っています。子育て、教育、医療、福祉、買い物、交通。日々の暮らしに最も近いところで地域を見ているのは女性の皆さんです。女性が働きやすい。子育てしやすい。地域活動に参加しやすい。そんな町をつくるのが、結果として若い世代を呼び込み、人口維持にもつながると思います。女性が元氣な地域は元氣です。女性が活躍できる町は強い町です。ぜひ今後の町政でも重要な視点として取り組んで頂きたいと思っています。

地域の力で育てる「にぎやかな過疎」

私は一箇所に全てを集めるまちづくりが正解だとは思っていません。もちろん効率化は必要です。しかし添田町は広い町です。英彦山地区もあれば津野地区もあります。中元寺地区もあります。それぞれに歴史があり文化があります。



令和5年8月27日、BRT開業記念式典でテープカットを行う服部知事や寺西町長



平成29年6月12日、熊谷真実さんがそえだまち観光大使就任しました



平成29年九州北部豪雨災害で流出した二又橋を視察する武田代議士、寺西町長



令和8年8月21日、16年の町長生活に幕を下ろし、職員に拍手で見送られる寺西町長



樹田地区の若者定住住宅入居者歓迎セレモニーでインタビューを受ける寺西町長



全分団の消防車の更新、活動服の新調など地域防災力強化を進めました



福太郎、福岡県、町で立地協定を結び、平成26年7月に添田町めんべい工場がオープン



町制施行100周年を迎えた平成23年には多くの記念行事を開催しました



平成22年8月22日、寺西町長初登庁



寺西明男町長 8月21日退任 16年間の感謝を胸に 未来へ託す添田町への想い

の維持、そして健康子育て福祉ゾーン構想へと、私は一貫して「次の世代は添田町で暮らし続けられる環境づくり」に取り組んで来ました。

未来を守るための決断

16年間を振り返ると、大きな決断もいくつかありました。学校統合はその一つです。地域から学校がなくなることへの不安や反対の声もありました。しかし子どもたちの教育環境を守るためには避けて通れない課題でした。

平成29年の九州北部豪雨では、日田彦山線が被災しました。鉄道復旧を望む声は非常に強く、私も自身も鉄道で復旧してほしいという思いを持っていました。しかし、現実を見たとき、鉄道復旧は極めて厳しい状況でした。BRT導入には多くの反対意見がありました。それでも私は交通そのものを失ってはいけないという思いで決断しました。今振り返ると、あの時の判断は簡単なものではありませんでしたが、地域交通を残すための苦渋の決断だったと思っています。

英彦山の再生にも取り組んできました。英彦山は添田町の宝です。しかし、宝は磨かなければ輝きません。観光振興や地域活性化に取り組みながら、未来への種まきを続けてきました。そして今、健康子育て福祉ゾーン構想など、新しい時代のまちづくりへの準備も進めています。ただ、私はこれらを成果として自慢したいわけではありません。

まちづくりに完成はありません。どの事業もまだ途中です。大切なのは、次の世代がしっかりと受け継ぎ、さらに発展させていくことだと思っています。

次の世代へつなぐ添田町の未来

さて、これからの添田町の課題は何でしょうか。

だから私は「小さな拠点づくり」が大切だと思っています。各地域がそれぞれの特色を活かしながら支え合う。小さくても賑わいのある拠点をつくる。それをつなぎ合わせて町全体を元気にする。私はこれが添田町らしい地域づくりだと思っています。

私がよく申し上げてきた「にぎやかな過疎」という言葉もそこにあります。人口が減っても元氣がなくなる必要はありません。高齢者も若者も子どもも、それぞれが役割を持ち、笑顔で暮らせる。そんな町を目指すことは十分可能だと思っています。

16年間の感謝を込めて

最後になります。16年間、多くの皆さんに支えていただきました。時には厳しいご意見もいただきました。しかし、その全てが添田町を思う気持ちだったと感謝しています。添田町は、個人のものではありません。次の世代の皆さんのものです。どうか人口減少だからと諦めないで下さい。どうか添田町には未来があるという自信を持って下さい。人口が減ることだけを嘆くのではなく、この町に住み続けたい、この町で子どもを育てたい、この町で歳を重ねたいと思える添田町をつくる。その挑戦をこれからも続けていきたいと思います。私はその土台づくりに16年間取り組んで来たつもりです。そして、今進めている取り組みや、これから必要となる課題に対し、行政だけに任せるのではなく、皆さん一人ひとりがまちづくりの主役として関わって頂きたいと思っています。

添田町にはまだまだ可能性があります。私はそう信じています。16年間、本当にありがとうございました。

寺西明男